

調	査
報	告

# 架橋離島と小規模離島のいま③

山口県下関市の島々(角島篇)

本誌編集部

本州最西端の自治体として知られる山口県下関市には、離島振興法指定離島である六連島(七十二人、令和二年国勢調査)と蓋井島(八四人)、対本土架橋によって法指定を解除された角島(六五〇人)の有人三島が所在する。これらの島々の現況について、前号から引き続き紹介する。

下関市北部に位置する角島へは、山陰本線特牛駅からバスで一日八便、所要時間約二五分。山陰本線は令和五年六月の大雨被害により特牛駅を含む区間が不通となっており、同六年三月現在、バスによる代行輸送が運行されている。

本号では架橋による経済活動の変化や、角島含む豊北地区の産業の現在を報告する(現状は令和五年七月の調査時)。

## 角島大橋の架橋に向けて

角島が大橋の建設によって本土とつながったのは平成一二年一月三日。延長は一七八〇メートルで、開通当時から一般道路の離島架橋としては国内最長だった。

現在、地区の振興協議会と社会福祉協議会の事務局長であり、着工当時架橋事業に携わっていた田村淳さん(七四歳)に話をうかがう。「架橋に向けて海底地質調査が始まった平成三年は、豊北町(現下関



市)の橋梁係長を務めており、翌四年から二年間、山口県の豊田土木事務所の主任技師として出向した。任期中は設計や工事の発注業務を担当。同年から、県予算での過疎代行道路整備事業になった」

角島と本土の間にある無人の鳩島は北長門海岸国定公園の第一種特別地域



森澄一實 角島漁協組長。

のため、周辺環境との調和と融合をコンセプトに、鳩島を迂回する曲線を描く迂回ルートとなった。平成五年九月に着工、同七年、阪神淡路大震災が公共施設に甚大な被害をもたらしたことを受け、国の通知に基づく支承・下部構造の設計見直しを経て、同一一年に大橋は開通した。開通時は町道だったが、翌年から県道となった。開通当時より、橋梁の中には水道管、送電線、電話線、光ファイバを内包している。「開通当時は、欄干から禁止されている釣りをする光景が見られた。橋が架かり島内の自宅に施錠するようになった人もいる」

## 角島漁業の変遷

明治九年に完成した島西端の角島灯台は、日本海側ではわが国で最初に設置された洋式灯台である。観光名所として知られる灯台の沖合漁場ではケンサキイカが多く獲れ、「灯りイカ」としてブランド化している。

「以前は特牛港に多くの漁船が集まり、イカを獲りに来ていた。現在は産卵地がさらに沖合に移っている」と森澄一實<sup>み</sup>角島漁協組長（七七歳）は話す。

現在、角島漁協の正組員は一八六人、全員が個人漁師だ。正組員には年間九〇日以上の出漁が条件付けられている。七〇年ぶりに改正された漁業法（令和二年二月施行）で漁業権が厳格化されたため、組員以外で漁に携わる家族などを準組員とした。「昭和初期はブリやヒラマサといった青物の一本釣りが漁業の中心だったが、養殖に押され売り上げが減少、四十年

代にブリやフグの養殖を試みたものの、水深が浅くうまくいかなかった」

昭和五十〜六十年代は高速艇によるアワビの密漁がひどかったという。漁協で監視船を出したが、効果はいまひとつだった。

その後、昭和から平成にかけてイワシの棒受け網は二〇隻、正組員は三〇〇人以上を数え、水揚げも一三億円ほどあった。平成の終わり頃にはサワラの一本釣りで月に一億円を水揚げしたこともあったが、いまでは年間五億円の水揚げ高を目標としている（令和四年は約四・八億円）。

年間を通した特産品がないことが課題となっており、かつてはパフンウニのアルコール漬けがそうだったが、温暖化による磯焼けで不漁になっている。大量に採れていたワカメも同様で、加工の期間に対して値が安く、いまはあっても採らない。

「後継者問題もある。以前は長男が漁

師を継いでいたが、親がそれを望まない。就業後の生活の保障が難しく、Iターン漁師の受け入れも休止している。このままでは水産業はさらに先細りしてしまふ」

架橋によって角島の生活は大きく変わった。漁業従事者にとっても影響は大きかった。かつては角島のそれぞれの港で長さ一〇メートルほどの木造船（地下船）を整備し、味噌や醤油、農耕用の牛、建築資材などを運んでいた。その後、架橋までは、角島漁協所有の運搬船「角漁丸」「角島丸」「鶴榮丸」でトラックや耕運機、燃料を入れたドラム缶などを運んだ。

当時、島に市場がある時代は、競りを終えた魚も特牛に三〇分かけて運搬船で運び、トラックに積み替えて下関の唐戸市場などに卸していたが、架橋後は保冷車が直接来島し、唐戸や福岡など高値で売れる市場を選択して卸せるようになった。

「架橋が流通を大きく変え、ケンサキイカなどの魚価も上がった。呼子や大阪から仲買が来島、活魚車で鮮度の高い順に搬送することもある。令和五年にはイワシを長門市の仙崎市場へ卸す流れも始まった」

## マリンアクティビティの活動

角島の大浜海岸と角島大橋の本土側でマリンアクティビティを通じた地域活動に取り組んでいる下関出身の新名文博さん（五八歳）は、NPO法人コバルトブルー下関ライフセービングクラ



新名文博(株)海耕舎代表取締役。

ブ（平成二四年設立）の理事で、株式会社海耕舎（同二八年設立）の代表取締役も務める。大学卒業後、競艇選手として二七一年間にわたり活躍。平成一一年にレース中の事故で負傷し、リハビリの一環として地元に戻りサーフィンを始めたことが現在の取り組みのきっかけとなった。

「海岸清掃活動を始めたのは架橋後の平成一三年頃。その後、サーフィン中、仲間が溺れていた人を救助したことをきっかけに、角島大橋周辺で事故防止に努めるボランティア活動を展開した」

NPOでは資格をもつライフセイバーとともに、海難防止をはじめ自然体験や環境教育に取り組む。また、B&G財団の休眠預金活用事業の助成により「プロジェクト豊夢」を実施。家庭環境により自然に触れる機会の少ない親子の参加を募り、自然体験格差を埋める活動を行なった。

収益事業が困難なNPOに代わり、

設立されたのが海耕舎である。「ホテル西長門リゾート」(後述)を拠点に、マリノアクティビティやムラサキウニの駆除体験といった観光プログラムを運営する。

平成二九年より日本財団の認定・助成を受け、NPOと海耕舎が協働し「渚の交番」を運営している。施設整備費はおよそ一億円、ライフセイバーやそれに準ずる大学生アルバイトが寝泊りできる拠点であり、ワーケーション施設としても活用されている。

現在、新名さんは「特定地域づくり事業協同組合制度」(※本誌二六四号参照)の活用も視野に、就労環境の改善などにも目を向けている。

## 角島島内の現状

市の角島公民館で赤崎祐享振興協議会長(七一歳)、吉山行雄角島支所長(六九歳)、中野水産を営む中野秀幸さん(七

二歳)に角島の暮らしについてうかがった。

「角島では観光誘致に特段力を入れていないが、マスコミに取り上げられるたびに来島者が増える。コロナ禍では遠出できない地元からの観光需要はあった」と、赤崎さんは話す。

土産物の販売は、架橋前から干物を扱う和田水産と、市の「しおかぜの里」(市商工会、県漁協、角島漁協、県農協、県西部森林組合で構成する「豊北町むらおこし物産振興協同組合」が指定管理で運営)のみで、しおかぜの里では角島住民がレストラン「フレッシユしおかぜ」「磯味亭」を運営する。宿泊は、レストラン併設の「グランビスタ角島」(素泊まり)がある。中野水産は架橋後の平成一二年に創業。当初は、漁協職員二人と競り場で直売していたが、諸事情から当時漁協役員だった中野さんが事業を引き取るかたちに。販売量の九〇パーセントは活魚で、その場で締めて三枚におろし

ている。販売先の多くは個人で、電話注文だけ受け付けている。県内の料理屋が車で取りに来ることもあるという。「時期に応じてタイやヒラメ、カワハギ、ヤリイカ、クエ、キジハタ、サザエ、アワビなどを販売。今は長男の秀吾(四三歳)と二人で切り盛りしている」

赤崎さんは現在サツマイモの栽培をしている。当初は二〇〇キロほどだったが、試行錯誤を経て現在では五トンまで生産できるようになった。うち四トンは青果で販売、残りで焼酎を醸造している。周南市の酒蔵・山縣本店で醸造した焼酎は、しおかぜの里では紅はるかを使った「角島芋焼酎」、道の駅(後述)ではシルクスイートを使った「夢さき」と、販売所ごとに卸す銘柄を分けている。

赤崎さんと吉山さんは架橋について「便利になったことも多いが、船上での住民との情報交換の機会がなくなっ」と話す。

## 体験プログラムを取り揃える

角島大橋と角島を眺望できる本土側の「ホテル西長門リゾート」は、鴨川グランドホテルグループの施設である。鴨川市出身の庄司隆治<sup>りゅうじ</sup>総支配人（六六歳）は、昭和六〇年頃に都内で日本料理店「鴨川」店長を務め、平成六年に同グループの福岡営業所長、同二五年に西長門リゾートの総支配人になった。「福岡にいた頃から架橋の協議会に加わり、大橋のPRを計画してきた。今でもテレビ局にセールスして、ロケ地として利用してもらったり、ニュースにラ



庄司隆治「ホテル西長門リゾート」  
総支配人。

イブカメラの映像を提供している」

ホテル西長門リゾートでは毎日無料で「角島ナイトツアー」を実施している。午後八時にホテルからマイクロボスで出発、約三〇分かけて角島灯台を往復する。長野県阿智村<sup>あちむら</sup>の星空観光を参考に庄司さんが発案し、自身で運転、案内することもあるという。ホテルでは体験型レジャープログラムも多く取り揃えている。夏季はマリニアクティビティをホテル併設のビーチで提供し、ライフセイビングを含む業務を新名さんの海耕舎に委託している。閑散期対策として農業体験なども実施している。現在は、台湾をはじめ海外からの観光客が増えているという。

## 田中商店の「いっしょ田中」

かつて町営船「角島丸」の発着港だった特牛港の切符売り場の業務を豊北町から受託していたのは田中モモヨさ



田中利明「田中商店」代表。

ん。昭和三〇年頃、モモヨさんは利用客の要望に応え、切符売り場で「田中商店」の業務も始めた。架橋に伴い待合所としての機能は失われたが、釣り客の需要は高く、当時店舗を運営していたモモヨさんの息子夫婦が町から店舗を譲り受け、釣り餌の販売を中心に営業は続けられた。現在は、モモヨさんの孫である田中利明さん（五九歳）が場所を変えて商店を経営している。

「親の介護のため山口銀行を早期退職し、平成二七年にUターンしました。業者が加工した地元海産品を販売しています」

利明さんは通販サイトを立ち上げ、「こっとい田中」として商品を独自ブランドディングし、アパレル製品も展開するなど、新規事業にも意欲的に取り組んでいる。

「特牛の町を盛り上げるため、自社の儲けよりも社会への貢献を大切にしたい」

## 道の駅「北浦街道豊北」

北西に角島を眺める丘の上に位置する道の駅「北浦街道豊北」は、トリックアードバイザー（宿泊施設やレストランなどに関する口コミサイト）の「道の駅ランキング」で上位を取ること多い豊北地区の観光名所の一つだ。市の施設であり、角島漁協、県漁協、商工会、県農協、森林組合、村おこし協同組合などが出資する株式会社道の駅豊北が指定管理者となっている。角島漁協が鮮魚の出品を中心に全面協力、運営一二年目を迎える。

かつて豊北町や県でも離島・半島の振興担当をしていた藤野 亘 駅長（六八歳）にお話をうかがう。

「特産品を売る『ほうほく夢市場』では三千点もの商品を取り揃えています。JAが事務局となっている出荷者協議会（会員数一四四人）が野菜を持ち込み、年間売り上げは八〇〇万円ほど。鮮魚の売り上げは年間一〜二億円ほどで、仲買人資格を取得した社員が特牛市場から直接買い付けています」

夢市場では、道の駅オリジナル開発の商品で豊北町産の米のみでつくった「ほうほくおこげせんべい」や「特牛イ



藤野 亘「道の駅北浦街道 豊北」駅長。

カ魚醬」、長門市の「百姓庵の塩」など多くの地元産品が並ぶ。藤野駅長は「地域の活性化」を道の駅の役割と位置付け、従業員六〇人をすべて地元で雇用している。

● 角島大橋の架橋により、船内での住民同士の意見交換など交流の場が少なくなり、連休やイベント開催時には交通渋滞が起きるなど、以前はなかった課題もみられるが、水産流通や観光の面では架橋の効果は非常に大きいものがある。離島の隘路だった救急搬送など、医療や防災の面でも、本土側と陸続きとなったことで生活環境は改善されてきている。コロナ禍以前の状況に戻り、域外との往来も増えつつある今、角島や豊北地区の方々がどのような活性化策を展開していくのか、前号まで二回にわたり報告した六連島と蓋井島の産業や地域づくりのうごきとともに、引き続き注目したい。

（奥村・三木）